
世界の調和者

yuuyas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の調和者

【Zコード】

N6499Y

【作者名】

yuuys

【あらすじ】

ある日、^{じんぐうまさかず}神富正和は少女を助けて死んでしまった。だが目を覚ますとそこには純白の世界、さらに目の前で絶世の美女が頭を下げていた？その人は自分のことを神と名乗つて・・・「彼方を私の神^{しん}認者^{にんしゃ}になつてもらつて、私の担当している世界に生まれ変わつていたときその世界の調和者^{ちょうわしゃ}になつて下さい！」え？なんで！？

よくある異世界転生ものです。魔法や魔物がいたりのファンタジーもので、主人公最強、ハーレムありく主人公朴念仁^{ハムニンジン}、人が死んだりします。この様なものが苦手なお方はご注意ください。

この作品は初の小説なので、誤字、脱字があると想いますが温かく見てください。よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初投稿です。以後よろしくお願ひします。

プロローグ

「明日から夏休みだ～」

俺、じんぐうまさかず神宮正和は叫んでいた。

なぜ叫んだかつて？ だつてね、去年の夏休みはおひさしだったんだ。

去年のこの日、なんか久しぶりに公園行きたいな～なんて思つて行つたら

いきなり、男の子が出てきて道路に飛び出して行つたんだよ。

そしたら、曲がり角からトラックが出てきて男の子が轢かれそうになつたんだ。

俺はとつと飛び出して、男の子を抱え込んだ。

「痛つ」

奇跡的にどちらとも無傷と言つわけにはいかなかつたようだ・・・

俺は激痛がする右腕の方を見ると中の肉が見えてた・・・

その後、男の子のお母さんが来て、物凄く感謝してくれて救急車まで呼んでくれた。

診察を請けたら、腕の皮がむけて肉が見えてただけだった。折れてるかと思った・・・

で、このせいで俺は3週間右腕が使い物にならなくなり、治つたと思ったら残りの1週間宿題に追われ夏休みのさよならだ！

今年こそは遊びまくつてやる！そんな事を思つていると去年事故にあつた公園に来ていた・・・

嫌な予感がする。

俺はこの場所からいち早く逃げるために、全力で逃げた。へたれだつて、しょうがないだろ

また遭つたら夏休み消えてしまひじゃないか。

しづらり走つて、わざわざ通つた交差点にいた。

「はあはあ」

500mぐらい思いつきり走つた。疲れたぜ・・・

俺は顔を上げると横断歩道に5、6歳の女の子が転んでいた。

信号が点灯し始めた、すぐ痛かつたのだろう。

危ないから女の子を助けようと

「ブッブー」

赤信号なのにワゴン車が曲がり始めた。後ろにはパトカーがいる。盗難車だろう。ん？あの子めっちゃ危なくない？

（助けなきや！）

俺は全力で走り、少女を抱えた。

また夏休みが消えたな。また来年夏休み。

「バーン！」

音と一緒に俺の体に激痛が放ち、それと共に意識が消えていった・・・

そして、一人の少年が少女助けて命を落とした。

プロローグ（後書き）

読んで下さった方ありがとうございました。

この話で主人公がどんな人か分かつたと思います。危険なのを分かつていても人を助けてしまう。主人公体质、これ以外にも人助けしているのですがそれは、ストックが切れたときに書かせていただきたいと思っています。

次回は神との対面で、ここで色々能力をもらいます。

次話も読んでもらえたなら嬉しいです。

神の世界（前書き）

2回目の投稿です。この作品で結構重要な神の登場です。名はヘルシスです。どうぞ、お楽しみください。

神の世界

「う～

真つ暗な世界だ。
体が重い、なんでだ?
何かあつたけ?

あれ? 確か女の子を助けて、そのまま・・・
死んだ?

でも、なんで体に感覚あるんだ?
力を入れると動けそうだな。

俺は回りを確認するため目を開いた。

「なんだ?」?

俺は驚いた。目の前には純白の世界で広がっていた。
それと、「何であなた頭下げるの?」

なんかわかんないけど目の前に金髪の女性が頭を下げていたのだ。

「すいませんでした!」

頭を下げながら腰を何度も折つては伸ばしを繰り返してた。

辛くないのだろうか？

あ、そうじゃなかった。

「頭上げてください。」

「はい・・・」

やっと顔を上げってくれた。

それにしてもきれい過ぎるだろ？

目の前の女性は絶世の美女と言つてもおかしくは無いだろ？

それくらいの美貌《びほう》だった。

でも、凄いまぶたがつるつるしてて。

にしても綺麗だな～

「どうしたのですか？ほつとして？」

あ、やっぱ見とれてた。

「い、いえちょっと考え方」として・・・それにしても何所ですか？

あと何で謝つていたんですか？

「ここですか？ここは神の世界という場所ですね。

謝つていた理由は・・・私のミスで彼方を死なせてしまつて・・・

「え？ミスですか・・・」

「はい・・・少し時空を歪めてしまい、
彼方の生きる時間を減らしてしまって・・・本当にすいませんでした。」

またもや頭を下げられてしまった。あの～何でまた涙田になるんですか！

「いいですよ。ミスぐらい誰にもありますから。

それより次進みません？ほら～あの、神の世界？だつてその事で。

「ありがとうございます。優しいですね。ではお言葉に甘えていこの説明をします。

神の世界言葉通りで、神々が住む世界です」

切り替え速え～神々が住む世界？じゃあこの人は・・・

「じゃあ、あなたは神様？」

「はい！私は神です。神宮正和さん」

「何で俺の名前を？」

「当たり前ですよ。神なんですから名前ぐらいは誰でも言えます」

「あ、そっか。神様の名前も教えてください。」

「私ですか？私はヘルシスです」

「ヘルシス、あ～すいませんヘルシス様」

やばい呼び捨ててしまつた。

「いいですよ、ヘルシスで。というか、敬語もやめてもらひえたら嬉しいです。」

「わかりました。じゃあ、ヘルシスさんで」

「はい！」

良かつた優しい神様で。

「 そういういえば何でここにいるんだ?
だってここは神の世界だよね? 」

「 ヘルシスさん。俺はなんでここにいるの?
「 あ、話してませんでしたね」

「 彼女は大きく息を吸つてから・・・

「 彼方に私の神認者になつてもらつて、
私の担当している世界に生まれ変わつていただき
その世界の調和者になつて下さい」

「 え? なんで! ?

「 何ですか! ? 」 こんな何にも取り得の無い俺なんか。 つていうか
神認者や調和者ってなんですか? 」

「 あ、あんまり一気に言わないでくださいよ~」
なんか、涙目になつてるし。 これって俺悪い?
つか神としての威厳なさ過ぎだらう。

なんか、静かになつてしまつた。 居すらい・・・
しうがない俺から言わないと・・・

「すいません。一気に言いました。じゃあ、一つ一つお願ひします」

俺つて結構甘いかも。

どうやら落ち着いた様で口を開いた。

「ありがとうございます。まずは神認者ですね・・・・」

俺は彼女の長いお話を聞いていた。
聞いた話だと神認者と言つのは、

俺みたいに前の世界で死んだ奴がある一定の条件が揃えば、
神が認め——この世界（神の世界）に呼ばれて、生まれ変わり
神が干渉できない世界の乱れなどを直すものらしい。
このとき、前の世界の記憶は残つていなく、
神との対面時からの記憶しか残つていないみたいだ。

さらに、この神認者つてのにえらばれた奴は
そいつを認めた神の、1000分の1の力と
神の武器をもつ事が出来るようだ。

世界の調和者（以後調和者と訳す）は、

その世界で一人で世界の一番高位神がその者気に入り、
ここに呼び出してその人に自分の担当している世界の調和者になつ
てもらつて、

神の世界

せかいのちょうわしゃ

その世界に戻り暴走した神認者^{しんにんしゃ}や魔物の数を倒したりして調和するようだ。

そして、その人は神認者と一緒に神の力を受け取る事が出来る。だが、力の桁が違う調和者はその神の10分の1の力を受け取れるみたいだ。

だが、神器はもらえないし普段は力事態に封印が掛かっていて、それを解除しなければその力は使えなく、他の神認者から比べてかなり弱いようだ。

たとえ、解除しても力に耐え切れず自爆するか、

その力を操つても体に負担が掛かり大怪我を負つたり、あまりの力に世界が拒絶して周囲の環境がかなり悪くなったりするようだ。

使い勝手悪いな。

俺のように調和者と神認者の一つの力をもつてている事は前代未聞のようだ。神認者はヘルシスさんが自分の世界に干渉したいからしたようだ。調和者は前の世界^{地球}の記憶をある程度もつていないと出来ないようなので（何故だかは教えてくれなかつた）俺には前の世界の記憶は残るようだ。

なんで俺が選ばれたかはヘルシスさんに気に入られた事と、事故に遭いそうになつた人たちを助けたりした事で、自分で言つのもなんだがそのへ、心が優しいっていうのが重要みたいだ／＼恥ずかしいな。

「誰に話しているんですか？」

えつ? なんで声に出していいはず。

「考えただけで思考は読めますよ。神ですかー。」「すごいっすね」

これしか言えない、今から考える事をやめよう。
読まれる。感1

三三〇

「で、話によると力と神器^{しんき}つてのをくれるみたいだけど・・・」「あんまり、驚かないんですね？まあ、話が早くていいんですけど

「じゃあ、お願ひ
「はい。まず、力を初めに」

あ～眩しいなんて素晴らしい笑顔なのだろう。

バカな事を考へてゐると、

「では、これがね」

そんな事を言つと、ヘルシスさんは二つちによつて来て

「ん」

え？唇にやわらかい感触が

キ、キ、キスしてる~

「ぱつあ~契約完了です。」

「なんで、キスなんですか~」

俺はいきなりされた驚きとこんなきれいな人がキスしてくれた事の嬉しさや恥ずかしさで混乱しながら言った。

「あ、人はキスを愛情表現でやるんですね、忘れてました。
今のは、契約のキスで神が神認者しんにんしゃにすることです。
どうですか？力が沸いてきたはずです。」

確かに力が沸いてきた。さつきはキスで気づかなかつたけどこれは凄いな。

契約が親父だと最悪だな。ヘルシスさんで良かつた。

俺は一人で安心していると苦笑いしているヘルシスさんに手招きされた。

「あの~いいですか？」
「すいません」
「いいんですよ」

なんて最高の笑顔だ癒される~

「次は、神器ですね。正和さんの神器は~「正和でいいよ。」え~

はい正和／／／

顔を赤くしてゐる。なんでだ？まあいいか。

「えつと～正和の神器はこれです。

ヘルシスさんは右手に力を込めるとなにに粒子が集まつてきて、一つに固まつた。

その手には白色の刀が握られていた。

「これは？

「これは、白の武器ホワイトウエポンです。

見た目のまんまですけどね。両手出してください。」

言われた通りに両手を出すと、

ヘルシスさんが白銀の武器を粒子にして俺の手に重ねた。彼女と俺の手の間が強く白く光つた。

彼女は手を離すと「出来上がりです。」

と言つてきた。俺の体は何にも変化がない。

「何か武器をイメージしてください。何でもいいですよ。

基本的に真空の場所じゃなければ出せますよ。

一種の創造能力を武器限定にして空間に出しているだけですから

俺は言われた通りに一本の短剣を想像してみると、
右手から何もかもが白い短剣が有つた。

「すうい！」

「はい！消す方法は無くなれって念じれば消えます。切れ味や精度は武器を想像した時のイメージが大切になります。例えば何でも切れろって思えば何でも切れる武器の出来上がりです。

「武器の数などは想像の時に思つてください」

「わかりました」

俺は消えろと念じた。すると短剣が粒子に戻り、右手に吸い込まれていった。

「なんてチート」

「はい、これは物理系最強武器ですから。他の神認者の方も持っていますけどね。」

「これはほじでは無いですけどね。」

あつ、でも物理以外でも空間、時空、特殊など色々ありますけど」

色々あるな。

俺はしばらくヘルシスさんと話した。

世界の名は「イニコート」と言い。詳しい事は転生した時に、勉強してくださいとのことだ。

神認者や調和者の力も転生した後で自分で見つけてくれと。「なんで？」って聞くと、

「転生する前に教えてしまつとそれを意識してしまつて、この世界で暴走してしまつので言えません。」

「 こつ彼女が言つてゐるのだからしようがないとじよつ。

「 転生後は記憶は残り、何かが遭つたら俺の夢の中で話しが出来るつて言つていた。 」

「 ビックリ！」

「 そろそろ、行くときですね。 いっしごと来てください。 」

「 言われた通りにヘルシスさんの所に行く。 」

「 ありがとうございます。 ヘルシスさん」
「 いえいえ、これからお願ひしますね。 正和」

「 こつこつと微笑んでいた。 幸せだ」

「 では転生を開始します。 空間転生術！」

「 彼女がそつ言つと俺の意識が無くなり、
再び真つ黒な空間に入つて行つた。 」

神の世界（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。今回は正和が死んだ後に来た神の世界のお話です。結構重要な話でした。神認者や、調和者（世界の調和者）の説明難しかったです。改めて文才の無さを自覚しました・・・

次話は新章です。今までのはブログだったので、今までよりも頑張って投稿していくつもり思います。次回もよろしくお願いします。

設定？（前書き）

設定です。今までの登場人物やその人達のステータスや使用魔法、登場魔物を書いていきます。あらわし方はE～A S S S S S
S X R 左から段々能力が上がっています。成人男性の平均がDとします。

この作品は、ギルドのランクや魔物、人、その他種族の強さでもこのあらわし方でいきます。無い場合は - で表します。
では、設定？です。どうぞ！

設定？

主要人物、その他種族
名 神宮 正和（男）

種族 人族 歳 14歳

体重 56kg 身長167cm

容姿 上の中

髪は黒の長さは首の中間くらい
目の色は黒

性格 誰かが困っていたら後先考えずに助けに行ってしまう。
女性の恋心には全く気づかない。

負けず嫌い、やさしい、努力家、朴念仁

ステータス 知力S 力A 走力S 体力A 精神B

集中A 回復C 運C

（ヘルシスから力をもらつた後）

知力S 力SSS 走力SSS 体力SSS 精神SSS
集中A 回復SSS 運C

（魔法ステータス）

魔力量 - 、精製度 - 、操作力 - 、戦闘力C（魔

法が使えない）

属性 火 - 、水 - 、風 - 、土 - 、雷 - 、闇 - 、光 - 、無 - 、
氷 - 、時 - 、重力 - 、空間 - 、

特殊能力 ホワイトエボン
白の武器 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

？～～

武器

ホワイトウェポン
白の武器

キャラ説明

誰でも助けてしまう優しい人。14歳の夏休み前に少女を助け死んでしまったが、神・ヘルシスのミスで死んでしまったと言う事で彼女の神認者と世界の調和者になり新たな世界に生まれ変わる事になつた。もともと運動神経や頭も悪くないため、ヘルシスから力をもらつた時に普通の人としてはありえないスペックになつてしまつた。

名 ヘルシス (女)

種族 神族 歳 ? 歳

体重 ? kg 身長 172 cm

顔 上の上

髪は金で長さが腰まである
目の色は金

性格 何事も完璧にやる。恥ずかしがりや。

完べき主義、恥ずかしがりや

ステータス 知力 R 力 R 走力 D 体力 SSS 体力 R

集中 R 回復 R 運 R

魔力量R、精製度R、操作力R、戦闘力R

属性

火R、水R、風R、土R、雷R、闇R、光R、無R、
氷R、時R、重力R、空間R、

特殊能力

ホワイトウェポン
白の武器、神氣、透し、思考解読、瞬間転移、夢介入、空間制御、

時間制御、

武器

ホワイトウェポン
白の武器

キャラ説明

正和の命を時空を歪めて短くしてしまうと言つミスをしてしまった、かなり天然な神様。だが、神の中ではトップクラスの力を秘めており、一つの世界の担当神である。ちょうど空いていた世界の調和者の座を正和に任せ更には世界に干渉するために自分の神認者の座までも与えてしまった。

モブキャラ

男の子（男）

特ないので無し

女の子（女）

特ないので無し

女のこのお母さん（女）
特になないので無し

登場魔法

・空間転生術

登場魔物
(登場しません)

設定？（後書き）

設定？でした。設定は章の終わりや、長ければ区切りのいい所でやつていきます。武器は5～10個ぐらい溜まつたら「武器設定」、道具は（以後アイテム）は30個ほど溜まればやろうと思います。次はいよいよ新章突入！です。

（編集して登場魔法だけ載せて詳しい設定は別に載せます）

誕生（前書き）

yuuya sです。この章は正和の転生先「イニコート」も世界観や正和の力について書こうと思います。さて、今回の話は短く正和がイニコートに産まれてくる話です。お楽しみください。

誕生

暗いな。

俺は確かに・・・ヘル시스さんに神の世界だっけか？で会つて・・・
しんにんしゃ 世界の調和者 神
神認者や調和者について話されて。

転生して、その世界の調和者になるんだっけか？
あれ？つーかここ何所だ？

俺はいきなりの状況に困惑していると
行き成り激しい光が体全体を包んだ。
眩しい！俺は声を出さうとする

「おおやーおおやー

ん？おおやーおおやー？

な、なんだ！声がおおやーだと一
よ、よし、れ、冷静になるんだ。
まずは深呼吸を（スーザー、スーザー）
OK落ち着いた。声出すぞー

「おおやーおおやー

・・・・・
なんじゃとー！
何の嫌がらせだ！

俺が何をした！

14歳に赤ちゃんをやらせるだとー！

精神的にきついだろ・・・『めんよ、母さん。

俺は30秒間心の中で泣き叫んだ・・・

おつと、何かがそれたな。
まず俺は、転生して・・・
あつ、そつか転生したから赤ちゃんなのか！
なーる。（どうしようかと思つたよ。良かつたー）

「アーサー産まれましたよー」

一人で安心感に浸つていると、
疲れきつたような、だがとても美しい女性の声が聞こえた。
誰だ？

「ああ、マリアアーヴィング方様。
この子の名前どうする？ジルも考えるか？」

今度は、逞しい男の人の声が聞こえてきて、
そのままアーサーと呼ばれる男性が俺を抱き上げた。

「うん！かんがえる。なまえはねー、オガ付くなまえがいいなあー

次は、幼い感じの男の子、多分ジルって子だろ？
その子の声が聞こえてきた。

「オですか？オ、オ、オ！オルッスなんて、どうですか？アーサー」「オルッス。いい名前だ。それにしよう、この子は今からオルッス・ワーソンだ！」

「おおっす。うん！いい、ぼくも、きにいつたつたよ」

三人で楽しそうに笑っている。

いいなあ～仲が良くて楽しそう。
そこで、今の状況と話を聞くと俺が赤ちゃんで、
産んでもくれたのはさつきの女性マリアみたいだな。

「オルッス、これからよろしくね」

女性マリアが優しく俺の頭を撫でながら言つてくれた。

俺は新たな家族に迎えられ、
新鮮な気持ちと家族の温かさを久しぶりに感じたせいか、
ものすごく眠たくなつてきた。

そして、俺はそんな気持ちを抱きながら深い深い眠りについていつた。

こうして、このイーユートの世界に、
神に世界の調和を任せられた一人の少年が誕生した。

誕生（後書き）

最後まで読んでくださつてありがとうございます。この話では登場人物が増えます。オルツスは正和ですから、3人ですけどね。この三人の設定などはこの章の中間か終わりで設定？として投稿したいと思います。

第2章の「幼少時代」では主にこの4人+村人+ぼちぼち魔物で進めていこうかなと思います。増やしすぎると名前に困ってしまいますが、そこは頑張つていこうと思います！では、次話でもよろしくお願いします。

夢（前書き）

寒いですね～」この頃、朝起きると「ぶるぶる」って体が震えます。さて、新たに投稿しました。タイトルは「夢」です。前にコメントを頂いて、説明不足かな～～と思つたので2話目の「神の世界」の補足として書かせてもらいました。では、お楽しみください。

ん? ここは何所だ?

いつもみたいに真っ暗ではないけど、
どちらかつて言うと明るいな。

俺、確か赤ちゃんになつてたはず。

眠たくなつて寝たのか。赤ちゃんだからしようがないな。

うん。一人で納得してみた。というか体が赤ちゃんなんだけど・・・
まあいいか。本当に、ここ何所だ?

「正和、ここですよ~」

その声は数時間前に聞いた、笑顔の素晴らしいあの、神様の声だ
つた。

「ヘルシスさん。お久しぶり?」
「お久しぶりです。正和。」

そう言つて彼女は、ふかく頭を下げる。俺もつられて礼をする。

「どうしたんですか? ヘルシスさんがいるつて事は、
ここは俺の夢の中ですよね。」

「はい、そうです。結構大変でした~神の世界とここを繋げるの。
軽く15年はかかりましたね」

「15年!」

夢の中

ビックリした。十五年つて、俺さつきこの世界来たばかりだぞ。

「大変なんですよ、空間の移動は、次はすぐ来れますけどね。」

「凄いですね！まあ神だから何でもありか・・・」

凄いなあ～これしか言えないよ。神、恐るべき。

「でつ、ヘルシスさん何で来たんですか？」

「えつとですね～前、力が暴走するかもしれないからと言つて詳しい力の事言わなかつたじゃないですか。」

あの後で気づいたんですけど、あんまり自分の力を知らないと他の神認者しんにんしゃの人達に襲われたり、

暴走した時に力の制御方法を知らないと、

私が来る前に暴走を止められないと思つたんですよ。

なので、力のある程度の情報イニヨートと、この世界の法則を説明しに来ました。」

要するに、俺が何も力を使えない小さい時や、
力を使つた時に暴走した時のために、
その力の制御方法を知らないと暴走を止められないからと、
前に俺が力を酷使し過ぎるとイニヨートが、
それを拒絶して周りの自然環境が悪くなるとか言つていたから
どのようにやつたら世界が拒絶しないですむかで
法則を説明するんだな

「わかりました。お願ひします。」

「はい。まず、正和さんの力から言いますね・・・」

→ ヘルシスさんが説明を始めてから約1時間→

長かつたぜ！一通り聞いてやつとわかった。

えつとつつまり、俺の力は神認者の神の1000分の1の力と、今は封印されている世界の調和者の神の10分の1力の二つある。

神認者の力は神器俺の場合は白の武器と、

神級魔術が使えることと、致命傷だと思われる傷も一瞬で直したり、契約した神の得意属性の魔法がとても強くなるらしい。

ヘルシスさんは全属性得意らしい。

(魔法には初級、下級、中級、上級、最上級があり、普通の人では最上級が使える魔法の限界で、

詠唱が必要になり、

神級は文字通り神のレベルの魔法で魔術と言つて神認者しか使えず、

詠唱が要らないようだ)

だが、いくら他の神認者達とは基本的な力では勝っていても、技能や経験の差で戦つたら即死するらしい・・・
だから、強くなるまでは戦うなと言われた。
どうやら他の神認者達は、あまり積極的に行動していないらしい。
大きな行動を起こす時は神が命令を出して、
神の利益になるように動くようだ。

調和者の力は6歳（平均的に自分で魔力を操れる歳）になつたら
封印が甘くなり、

過程さえふめば、俺でも封印を一時解放出来るようだ。
開放すると魔力がほぼ、上限無しで使えるようになる事だ。
でも、力が暴走したりする事もあり。
それを止めるには、自分で「一時封印魔術」を使わないと駄目らしい。

後で覚えさせられるようだ・・・

後の力は飢えた土地、人工的に破壊された自然の回復や、
神認者の精神世界から神の世界へ干渉する力だ。

（神認者が行動した時にその行動が世界にとつて、
何らかの悪影響が及ぶのなら、その神認者を倒し
その人の精神世界から直接神の世界に干渉して
神を倒すのが調和者の仕事だからだ。）

その後にヘルシスさんが神に罰を与えて^{憎悪}反省させるようだ。
それ以外は、魔物を倒したときに出る魂を清め
清浄な魂にする事だ。

つまり、調和者の力は世界の乱れを調和するためのようなものがほとんどだ。

ホワイト・ウェポン
白い武器は前に言われた通り、

俺が思えば、色は絶対に白だがどんな武器を造れる。
後は消えろと念じなけば、武器は壊れるまで消えないらしい。

イニューートでは、色々な種族が共存しており、

（人族、魔族、人獣族、獣族、エルフ族、妖精族、聖獣族、天使族、
悪魔族）など

沢山いるようだ。陸は大きな大陸が二つあって、
他にもさまざまな島が多くあると言う。

エルフ、妖精、聖獣以外は村や町に住んでおり、
この三つの種族はそれぞれ特定の場所にいるようだ。
言葉はヘルシスさんが俺に「つうやくまほう通訳魔法」を
かけているから余計な事は考えなくていいとの事だ。

問題なのは急激に魔物の数が爆発的に増えている、
民間の種族達が襲われたりする被害が多発しているようだ。
なので、まず神認者を倒すより先に、

魔物の数を減らせてくれると嬉しいことだ。

だが、倒した際に出る魂精霊が人の中に入ると、
その人は、魔物の魂精霊に取り付かれ自らも魔物になり、
人を襲うようだ。

空気中の魔力

さらに、この世界にあまり強い負担をかけるとマナが暴れて、
自然環境を壊すようだ。

なので、この世界の人達は

まず、結界魔法を覚えてから攻撃、回復、補助などの魔法を覚える
ようだ。

これが、ヘルシスさんが一時間ぐらいかけて説明してくれた内容を
俺なりに、噛み砕いて改めて自分で自分自身に説明したことだ。

「相変わらず長いですね～」

俺はもうふらふらだ。

すると、苦笑いしてから

「長くて、すいません。このくらいです。

後は正和に「一時封印術」を

習得してもらうだけですね。

これは、神級なので詠唱は必要ありません。

やり方は自分の胸に魔力を貯めてそれを凝縮する感じです。

ヘルシスさんがやつて見せてくれた。

すると、ヘルシスさんの体中の魔力が胸に集まつていって、

「す、」と息を吸つてから

「一時封印術！」

と言つた。

すると、白い力がその魔力を上から飲み込んだ。

パチパチ～、拍手！凄いね～

「さあ、正和もやってみましよう

「OKです」

俺は集中すると赤ちゃんの小さな体の魔力が胸に集まつてくれる。
そして・・・「一時封印魔術！」

と叫ぶと、俺もヘルシスさんと同じように
白い力が集つていき魔力を飲み込んだ。

体に感じていた魔力が無くなつた感じがする・・・

「一のくらいですかね。言つ事は言いました。「一時封印術」は、一時間ぐらゐしか効かないの、使つたのを感知したら私が「封印魔術」を

掛けに行きますので」

「わかりました。ありがとうございます」

「あつ！時間の事言つておられてました。イニコートの時間は前地の世球と同じです。

正和さんが産まれたのが夜だったので、産まれた後日の朝ですねイニコートの事をよろしくお願ひします」

「はい、頑張つてきます」

「はい頑張つてください」

彼女がそつと言つて、「シココ」と笑つと
「空間移動魔術」と言つて、

俺の夢から消えて行つた・・・

しばらくすると、何所からかやさしい声が聞こえてきた。
それは昨日聞いた。俺を産んでくれた新しい母の声だ。

田を覚ますと「一」に来てからの始めての一田が始まった。
一
一
一

夢（後書き）

どうでしたか？2話ではわからなかつた事がわかつてもうえいでたら嬉しいです。

前書きでも書いた。コメントを頂いた事なんですが・・・とても参考になりました。ありがとうございました。

私は始めて小説と言うものを書くので色々と気づかないで投稿してしまつて、後で「あ、」ってなる事が多いでコメントで指摘くださつて、とてもありがたく思います。

他の人々も気になる事や指摘などあれば「コメントをよひじへお願ひします。

最後まで読んでくださつてありがとうございました。

5年後～前編～（前書き）

6話目の投稿です！いやあ～本当に寒い。風ひいちやいました。
さて、私の私情はここまでにしてこの話の説明です！

タイトル通り5年後です。速いですね。のろのろ書いていくよりも、
早く正和オルフスの活躍を書いた方がいいかな～と思つたので一気に5年も
進めちゃいました！と言う事で結構、幼少期の展開は素早く書こう
かなと思います。

この話は、なんと～ヒロインが登場します～どんな子かは、この
話を見て下さい！では、お楽しみください～！

5年後～前編～

「ふあ～」

ぼくは大きな欠伸して起きた。

現在7時30分、日付けは12月25日の505年です。
あ、今日僕の誕生日だ。

プレゼント～

ベットから飛び起きて周りを見る。

「あつた～！」

見つけた！ベットの下に5角形の小さなケースがあった。
それを開けようとしてケースを持つてみる。
すると、箱の側面に一枚の紙が挟まっていた。
？なんか書いてある。母上の字だ。
読んでみよう・・・

オルツス誕生日おめでとう。

今日はあなたの5回目の誕生日ですね。おめでとうございます。
早速ですがこの紙を見ているって事は五角形の箱を持っていますね。
その中に入っているのはネックレスです。なぜ行き成りこのプレゼ

ントを渡したかと言つと、

ワーソン家の決まりで男の子の場合5歳の誕生日の時に、
ネックレスそれをその子が起きた時に渡すというのが決まりになつています。
お母さん達は今日のあなたの誕生日パーティーの準備で王都へ買い
出しに行つています。

なので、私達はお昼まで帰つてこれません。

少し寂しいかと思いますが我慢してください。

下の部屋にはウールがいるのでウールと遊んでいてくださいね。
朝食は空間庫に入つてるのでそれを食べてください。

ご飯を食べている時にさつきのネックレスをかけてみてください。
それでは、今日の誕生日パーティー楽しみにしてくださいね。

なるほど、母上たちは買い物に行つたのか。

そういうえば、さつきは浮かれていて考えて無かつたがもう3年か
この世界に来たのは・・・

そうだな~何にもやる事無いし、腹も減つてないし今までの事を振
り返つてみるか・・・

ぼくの名前は神宮正和で地球という世界に住んでいた。

でも、14歳の時にぼくは人を助けて死んでしまった。

だけど、目を覚ますとそこにはヘルシスつて言う神様がいて、
ぼくにその人は神^神認^{しんにん}者^{しゃ}と世界^{せかい}の調^{せかいの}和^わ者^{しゃ}の力をくれて、

僕はヘルシスさんの神認者と、この世界の調和者つていう形でイニ
コートに転生してきた。

僕が産まれたのは、ワーソン家だ。

父上のアーサーがぼく達の住む大陸マーズの南の森にあるイチイ村と言つところの領主をしている。

ワーソン家は中流貴族でそこそこの権力をもつていて結構大きい屋敷に住んでいる。

家族構成は父がアサー、母はマリア、兄はジル、そしてぼくオルフスだ。

さらにペットを飼つていて名前はウールだ。

5年間であつた事は色々あるから氣が向いたら思い出してみよう。

父上はさつきも説明が貴族だ。背は180前後くらいで金色の髪と、

同色の目をしている。この世界では目や髪の色が様々ある。顔はイケメン過ぎるくらいで26歳だ。

母上は元平民だが魔法学校に通つていて、

学年では主席を取るほど優秀な魔法戦闘師だ。

父上とは学校の在籍中に知り合つて、父上の一眼ぼれだ。

その後に色々とあつたみたいだが、うまくいって今ではラブラブだ。色々とあつた事は今度話そう。

背丈は165前後、金色の髪と赤い色の目が特徴で、ヘルシスさん並の美貌。26歳。

兄上のジルは父と同じ目と髪を持つていて、ぼくの事を大切にしてくれるとつても優しい兄だ。

兄上はワーソン家を引き継ぐ事が決まっていて後3年したら、父上と母上の行つていた学校に入ることになつていて、背丈は140前後だ。

幼いながらも村の女の子に20回も告白をされている。
イケメンだ・・・そこは気に入らない・・・今9歳だ。

ぼくは、さつきも行つたが転生者でこの世界の調和者であり、
ヘルシスさんの神認者だ。

金色の髪と左に金色の目、右に赤色の目のオッドアイだ。
この事は、家族にしか知られて無い。

父上がぼくが産まれて、その事に気づき左目に「へんじょくまほつ変色魔法」を
掛けたため知られずにすんだ。

オッドアイはこの世界での「しんさい神災」を

意味していくあまり良く思われていない。

なぜ、一人称が俺からぼくになったかと言つと、
前に俺つて言つたら・・・母上が泣きながら

「オ、オルツスが～ふ、ふ、不良になっちゃつた～」

と言いながらぼくをぶらぶら揺らすから・・・
それがトラウマになつてしまい、今ではぼくになつてている・・・
いづれは俺に直すつもりだ。

ぼくの背は100前後だ。

ぼくの神器の白の武器は、

まだ使つていない、産まれた日以来ヘルシスさんは夢の中に現れて
いなくて、

何も出来ない状態だ。もつちよつとしたら、
兄上が今、父上と鍛錬をしているから、
僕も鍛錬を請われるようになつて思つ。

頑張ろー！

ウールはワーソン家で飼っている。獣族の狼型だ。

獣族は地球でいう動物みたいなものだが、高い知能を保有していてもっとも高いものでは人型になれるほどである。

人獣族は人族とこの獣族（人型になれる）の子供である。獣族はよく、使い魔として呼ばれる。元は父上の使い魔だったらしいが、

今はペットになっている。何でかは次の機会で話そう。体長は90前後で耳がもふもふしていて可愛いし温かい。凄く気に入っている。

「ふあ～」

また、欠伸が出たよ。このくらいかな？
お腹空いたな、ご飯食べよう。

その時にプレゼントのネックレスを見てみよう。
ぼくは服を着替えてウールの居る1階の居間に下りて行つた。

「がうがう～」

居間に下りるとウールが吠えながら、しつこに寄つて來た。

「おはよう、ウール。僕たち昼過ぎまで一人だよ

そり、問い合わせると・・・

「がう！」

と、返事をしてくれた。本当に頭が良いんだな。
ぼくは関心しているとウールが、
ぼくの分と自分の分の朝食を持ってきてくれた。

「ありがとう、ウール
「がう~」

撫でてやると、ウールは氣持ちよさやつに耳を細めて、
吠えてくれた。

今日の朝食はパンとハウイ兎のソーテーと水だ。
(ハウイ兎は魔物である。魔物は倒した後に淨化すれば食べれる。
結構おいしい)

「いただきま~す」

ふ~食べ終わった。美味しかった。

「(ノ)馳走様でした」

「がう~」

よし、ネックレスをかけてみよう。

ぼくは五角形の箱からネックレスを取り出し、首にかけてみた・・・

「どう? オルッス?」

ん!~お、お、女の子の声が聞こえる。

ぼくは声のしている方を向くと、そこには・・・

「…・・・え?」

そこには、可愛らしく首を傾げている狼型の獣族のウールがいた！

「おっ！ その表情は聞こえているね。やつた！」

や」と会えたよ」「マヌタ」

そう言つと、意味がわからなく混乱してゐるぼくにウールが抱き付いてきた。

「マスター、これからよろしくだね」。マスター

今度はほくの顔をぺろぺろ舐めてきた。

「ちよ、ちよ、ちよつと待つて、ウールなの?」

そう効くと・・・

「 そ う だ よ 」。マスター 私 だ よ ！ わ た し ！ ウ ル だ よ ！

マジですか！これ原因だよね・・・

卷之三

「マスター取つても変わらないよ」

•
•
•

何じやこりや～！！！！！！！！！！！！！！！！

心の中で叫んだ！この思いは誰が受け止めてくれるのだろう？

「ふ～、ふ～」

よしー落ち着いた！

「OK～OK～。君はウールだね

「わ～だよー私ウールだよー」

テンション高いね～

「なんで、喋れるの？」

「え～とね～マスターがそのネックレスかけたから

うん～答えにな～てないな～

「でも、今外してるよ」

「うんとね～さつきネックレス付けてたときに契約したから…
婚姻の…・・・まつ／＼」

「なんじやと～！～！」

ぼくは子供らしからぬ声を張り上げた。

こ～こ～婚約だと～！？

しかも、「まつ／＼」ってなんだあ～！

つーか、どうやつたら婚姻が今の状況と繋がるんだ！

「はあ～はあ～はあ～」

「お、落ち着いて。じょ、冗談だよ～

マスターとはい～ずれはなるけど…・・・まつ／＼」

だから、「まつ／＼」ってなんなんだあ～！

ん？話がそれてるな。

「 もひー・マスター！ 話それけやつたじやないですかー。」

「 ぼくの頭から・・・・・ピシッ (キレタ音)

「 お前のせこじゅりゅうつー。」

「 」の後ウールとオ・ハ・ナ・シをしました。

5年後～前編～（後書き）

どうでしたか？ヒロイン。結構ボケさせました。オルツス正和には突っ込みを担当してもらいます。今はヒロインって感じはしませんが色々と頑張らせます。次の話はこれの続きです。後編ですね！今度は少しウールの過去を混ぜてみようかと・・・ネックレスも次で説明します。

感想、又は一言お待ちしております。

最後まで読んで下さってありがとうございました。

5年後～後編～（前書き）

こんにちはーいつも見て下わってありがとうございます。
7話目です。前回の5年後～前編～の続きの後編です。ではどうぞ！

皆わん、こんこちはオルツス・ワーソンです。

あ、本当は神宮正和ね。

やあ～死んだあの日から驚く事多いや～

なんと！飼ってるペットが喋っちゃったよ。

まあ、色々話したから聞いて下さい。

あ～久しぶりにキレタな。

うん。でウールに（喋ったペット）

お話というなの、イライラ発散をした。

大丈夫だ！暴力は使っていない・・・」^{うつむかうつむかして}氣絶をした
けど・・・

しばらくしたら氣絶していたウールが目を覚ました。

「マスター酷いよ。傷ものになちゃったよ～

お嫁に行けない～」

「お前が悪い。ふざけ過ぎだ！」

ぼくは、いかにも怒っていますよ霧岡派で言っているの・・・

「マスターのせいだよ。マスターがもうつてね。キャフ」

そう言つとウールは顔を赤め。モジモジし始めた。

「、こいつは強敵だ。一切ぼくの言う事に耳をさない。

・・・ しょうがない。

「そこは、後にしてまず、ウールの正体が何なのか言つてよ。話が進まない」

「もう、しょうがないな。マスターは、いいよ、私の正体からだね。まず人型になろうか」

ん？人型だつて・・・！

え！？人型つてかなり知力の高い獣族じゃないと出来ないはず。もともと、ウールは狼型の獣族だから。たしか、狼型は獣族の中でもかなり頭のいい方だけど・・・。なれるのは、フェンリル種だけだつたはず。でも、フェンリル種はかなり大きかつた。ウールみたいに小さくない。

そんな事を考へて、ウールは白い煙に包まれていく・・・

やがて、ウールは煙に包まれ、ぼくは視認出来なくなつた。

「どうかな。マスター！つぶつぶ～」

煙がだんだん晴れてきた。

と言つたが、ウールが言葉から興奮と言つなの感情がみえるんだが、なんで、コイツ興奮してるんだよ・・・。は、確かにこういう感じになつたら出でくるのは大抵・・・。

裸の女の子！

まずい！

大変な事に気づきその場から立ち去らうとする

「ガシッ」

誰かがぼくの肩を掴んでいる・・・

これはホラーですか！？

マジ恐い、マジ恐い、マジ恐い。

恐る恐る、後ろを振り向くと・・・なんと！そこには

「桃色の桃源郷が！」

「アホか！心読んでるんじゃねつ！」

ウールを叩いた。

確かにそこには桃色の桃源郷が見えたけど・・・

「痛いよ～マスター酷いよ、正体を見せただけなのに・・・

やあ～確かに今のは心読まれただけだから、
ウールはそんなに悪くないんだが、マジ恐いんだぞ～

「じめん。やり過ぎた」

「ニヤリ、じゃあ～マスター私の胸に溺れて！」

「なぜ、そういうー！」

今度は殴りました。

ウールは部屋の片隅で丸まっています。

衝撃的過ぎた。

だって今のウールの姿は官能的過ぎる・・・
歳は15～16位で背は170前後、

髪はウールの狼型の時と同じ毛の銀色、
目は赤い。

スタイルは出るところは出でて、絞まつてこむところは絞まつてこむ。
ナイス！って言いたくなるだろつ。

だが！今のぼくは5歳児だ。

精神年齢は19だから結構やばかっただが、この体に影響されて興奮はしない。

始めてこの体で良かつたと思う。

あのままだつたら、ぼくの理性の鎖が千切れ……

考えただけで恐ろしい。

「もういいから、服着て」

「わかつたよ、マスター。でも服どこ？」

あれ？確かに考えてみたら服無いな。

母上の部屋に行くのはさすがに不味いし、ぼくの服だと今よりも口くなる……

困った……

「やつぱり、このままでー」

「だめだ！」

なぜ、そこで顔を明るくする。

「そうだー！」

思いついたぞー！この力を使ってみよう。

服も戦闘向きにしたら武器になるはず！

ぼくは、早速手に力を込める。

イメージするのは……

（戦闘向きの絶対に切れない布製の服）

イメージすると、ぼくの手には白い粒子が集まってきた段々、形が構成されてきた。

「ピッカツ！」

と強い光がぼくの手のひらから出てきた。

光が無くなると、ぼくの手には白いシャツと同色のズボンがあつた。

「とりあえず、これ着てウール
「うん」

ここまでが長かった。疲れたぜ。
でも、初めてだつたけど使えたな。白の武器
これは今、消したら大変な事になるから
ウールが狼型になつたら戻そう。
じゃあ、話を聞くか。

「さあ、話してもううよウール」

すると、ウールはさつきまで、
ふざけていた奴は思えないほど、真剣な顔になつて言つた。

「わかつたよ、マスター。

まず、私の正体だね。私はマスターも勘付いている通り、
フェンリル種だよ。それもかなり上位にいる

「?なんで、ウールはこんな家のペットになつてているんだ?」

そうだ、フェンリル種は魔物とは違うが基本的には、
森などで集団で暮らしている。

しかも誇りが高く、使い魔として召喚されても

契約を拒み、始めは戦闘を行い勝利し、主を認めないと

そのまま、逃げられてしまうのだ。

たとえ、契約をしても主以外の言う事は聞かない。

ホワイトウェポン

だから、フロンリル種はこの様な家でペットになつて居るのは有り得ないのだ。

でも、ウールは家族みんなの言つ事を聞いている。

なぜだ？

「ペシードじやなくて家族^{ファミリー}と言つて欲しいな～」

そう言つてニーチコリと微笑む。

若干ふざけたる感があるけどそのままにしておこう。

話が進まない。

「わかった。じゃあどうして家族に？」

「うん マスターはアーサーが

私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚したのを知ってるよね

父上のこと思いっきり呼び捨てだよ・・・

まあ、いいか。

ん？気になることがあつたな。

確か「私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚した・・・

「おかしくないか？だつて、父上が召喚したのは確かに狼型の獣族だつたけど、

それってウールの事じゃないのか？」

すると、首を振つて

「違うよ。アーサーが召喚したのは私のお母さん」

「そなのか。で、なんでこの話と繋がる？」

「繋がり？繋がりは、簡単だよ。

私のお母さんがアーサーの事を気にいりやつて

そのまま・・・その間に「

「え？ それって母上のこと？」

まづくない？ したらほくつて人獣族に分類されるよね。

「違うよ～ そのまえにフヨンリル族は精が無くても子は産まれるから

良かつた。でも精を必要としないって、生き物で有り得るのか？

「OK。まずはそこを置いておいつ。

また話がそれたな、

ウールのお母さんが父上とどうなったの？」

「私のお母さんがアーサーの使い魔つて事までは言つたね。それで、アーサーの事を気に入つたお母さんは、子を作らうとしたんだけど、

そのときにアーサーがマリアのこと好きで、断つたから自分で子を宿し産んだって訳で、それが私

父上やるな～母上を選んで振つたんだ。男前だな。

「でも、それじゃあウールのお母さんは何所に行つたの？」

「私のお母さんは、死んじやつたんだ・・・」

「ごめん。それはわかつたけど

それがどうしてウールが^{ワーン家}ここにいるのに関係してるんだ？」

「それはね。お母さんが死ぬ間際アーサーに

「私の子を貴方の子のお嫁にいかせるね」って契約したんだよ。無許可で

「何で無許可！？ 勝手に契約は不味いだるい

「いいんだよ。それでアーサーは私の事を自分の使い魔の子だからってことでこの家にいるんだよ」

なるほど、そんな事があったのか。

でも、あのネックレスは何なんだ？

「あのネックレスは？」

「あのネックレスは、お母さんが「錯覚魔法」をかけて、5歳になるとあげるって事をワーソン家の決まりにして、ネックレス自体は私との契約」

「マジですか。

でも、兄上は反応しなかつたんだろう？」

「そうだよ。ジルでも良かつたんだけど、こうやって喋れなかつたから私が拒否したの。マスターはただの子供じやないし」

「何言つてるんだよ。ウールぼくはただの子供だよ」
試してみるか？

「嘘は良くないよマスター。
お母さんが私の為にある程度知識を残してくれたから
わかるけど、マスターの魔力は2つの異様な力で出来ていてるのが
わかるもん」

さすが、フェンリル種だな。知力は人よりあるな。
どうする？ここで言うか？

「どうやら、どこへ行つてもウールは付いて来るし、
フェンリル族はかなり強い。

本当の事を話して完全に味方に付けるか?
さつき、知識ももつたつて言つていたから
相談できる事は多いかもな。
ここは乗るべきだ!

「・・・やうだよ。ウール、ぼくはただの子じゃない

「やつぱりね。どうせ神認者かみにんしゃかなんかでしょ」

やつぱりまで氣づいているのか。さすがだな。

「うん。ウールの予想通り。ぼくは神認者かみにんしゃだ」

そつ告げると、一々口一々口して笑いかけてくる。

「OKだよ。マスターこれからよろしくね

「ああ、よろしく」

「で、ウール小さくなれる?
「ん?出来るけど、どうして?」

ぼく達は話をこんな感じで続けていた。

「色々と田のやり場に困るから・・・

そうなのだ。今のウールは田のやり場に困る・・・
だって、見た目15・16のウールが、

「ぼくの簡易で作った白の服を上下に一枚着てるだけ。
後は、」想像にお任せします。

「わかったよ。マスターどのくらいがいい？」

「じゃあ、ぼくと同い年くらいで……」

「え、もしかしてマスターは口リ

「ちょっとまたロリコンではない」

良かつたよ。ウールは心配したのだ

本当にぼくはロリコンではない。

そんな事を考えていると、ウールはいつの間にか
ぼく位の背丈になつていて顔も少し幼くなつていた。
あ、やばい服作らなきや。

そう思つて、ぼくは服創造に取りかかった。

これから付いて来てもらつから、簡易じやない方が良いか。
一応女の子だし、ズボンタイプよりもドレスっぽい方が良いし、
肌着は無理だな。色々と無理だ。勘弁してもらおう。

（さつきより小さくて、機能性は絶対に切れない耐久性、
短縮自在でこれからウールが大きくなつても着れて、人型になつ
た時のみ現れる。

デザインは下は膝までの丈のドレスみたいの……

そう思つて作ると膝位までの丈の白のドレスが出来た。

「ウール。これ着て」

そう言つてドレスを渡す。

ウールは嬉しそうに着てくれた。

じゅうじゅうあると・・・

「 「 「 ただいま～ 」 」

皆が帰つてきたようだ。

今日はほくの誕生日パーティーだ。 もう、 楽しそう。

5年後～後編～（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。今回の話ばかりでしたか？書いてて自分も、ん？って思つてしましました・・・意味の分からないところや誤字、脱字がありましたら一言でお願いします。他にも感想お待ちします。

次話はワーソン家の皆にワールの事を説明し、オル^{正和}ツスの誕生日パーティー会の話だと思います。では、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6499y/>

世界の調和者

2011年11月26日16時54分発行